



1 こんにちは。東京富士美術館の鴨木と申します。よろしくお願いいたします。



2 本日は、2つの立場からご報告させていただきます。



3 一つは、東京富士美術館の学芸員で、収蔵品データベースの担当者としての立場です。

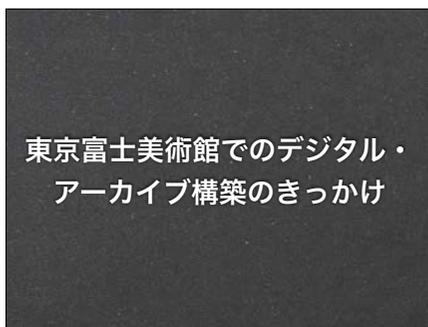


4 もう一つは、ジャパンサーチのつなぎ役である全国美術館会議、情報・資料研究部会、幹事としての立場です。

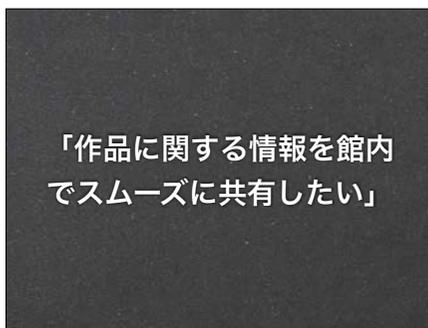




- 5 写真は情報・資料研究部会の会合風景です（2019年6月19日第54回部会合）。全国美術館会議はジャパンサーチの他の分野のつなぎ役と違う特殊なつなぎ役で、直接的にはデータ提供を行いません。この点は美術館の所蔵作品情報公開があまり進んでいないことに関係していますが、また後ほど触れます。



- 6 それでは始めに東京富士美術館の収蔵品データベース担当者としてアーカイブ構築の経緯について報告します。



- 7 思い返せば自館で収蔵品データベースの構築を始めたそもそもの動機は、作品の情報を館内でスムーズに共有できるようにしたいというものでした。



- 8 私が学芸員になった1996年当時は、まだワープロ専用機の時代で、館内ではタイプライターも現役でした。写真は当時の収蔵品台帳です。作品は手書きの台帳とカードで管理されていましたが、調査等で更新された最新情報は先輩学芸員の頭の中にある、という状態でした。



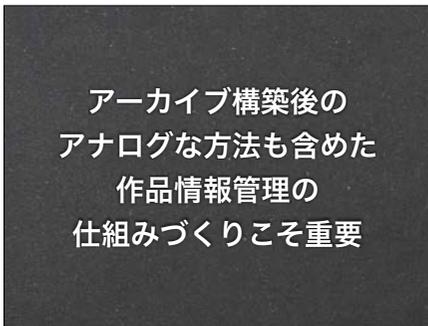
- 9 こちらの写真は当館の写真コレクションの作品カードです。出品リスト作成や展示キャプションの制作の際に、最新情報が分からないという状態を解消するため、当時発売されたばかりの市販データベースソフトを使ってデータベースを作り始めました。



- 10 そしてこれが現在の収蔵品データベースです。こうした経緯から、アーカイブ構築の狙いは、いかに情報の共有が簡単にできるかでした。ですから、使いやすく、更新が滞ってしまうような作りっぱなしのデータベースでは本来の目的を損なってしまうと考えます。



- 11 極端な話を言えば、館内だけの情報共有であれば無理にデータベースを使わなくても、紙に手書きのカードが適切に更新・共有されていればよいわけです。写真のように収蔵番号順の作品ファイルに情報を整理し、いつでも参照できる、という環境を作ることもよいわけです。



- 12 アーカイブ構築の目的を考えると、むしろデータベースを構築した後、如何に更新・運用するか、という点がもっとも重要だと思います。アナログな方法も含めた作品情報管理の仕組みづくりこそが大切だと考えています。

東京富士美術館HPにおける 所蔵作品情報発信の概要

13 次に美術館のウェブサイトにおける所蔵作品情報発信の現状と課題について見ていきます。



14 美術館のホームページを見ると、所蔵作品についての情報発信があまりうまくいっていないのではと思うことがあります。今日は美術館のウェブサイトの課題についてわかりやすくするため、あえて辛口です。図版は東京富士美術館の画面を使っていますが、イメージです。



15 よくあるパターンは二つです。一つは一枚ページに代表作品のみ掲載するケース。もう一つはデータベースを使うケースです。前者は通り一遍の説明があるだけなので、一度見たら二度は見ません。後者は、大抵は無愛想な検索窓が一つあるだけです。思いついたキーワードを入れても「ヒットなし」ばかりでは、見る気力が削がれます。



16 閲覧者に対して、もっと親切な情報提供が必要ではないでしょうか。検索後、作品情報が表示された場合も、作品名、作者名、制作年などの最低限度の情報と、サムネイル程度のごく小さな画像が表示されるだけのことも多いです。解説文があればいい方で、まして英語情報などはありません。



17 これでは作品について理解を深めることはできません。画像であればより高画質な画像を。詳細な解説文を。もちろんバイリンガルで。来歴・出品歴・参考文献などの情報があれば、以前の所蔵先、出品された展覧会などを参照することができ、作品の文脈の糸が広がり、より深い理解につながります。



18 展覧会で作品を見る場合は、その作品がなぜここに展示されているのか、という関係性や意味の中から作品理解を深めることができます。同じようにWeb上でも作品についての情報を適切に発信することで作品理解を深めることが可能だと思います。



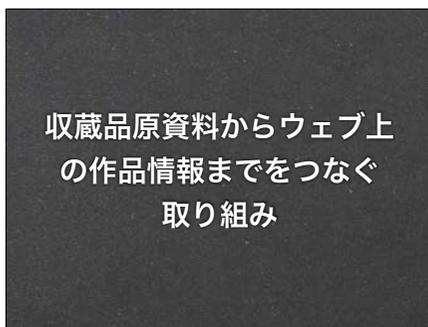
19 また、データベースを使ったサイトの場合、検索窓しかないケースに顕著なように、作品をブラウズすることが容易ではない欠点があります。一方、一枚ページで概要を掲載する方法は、コレクションの特徴をわかりやすく提示できます。それぞれの良さを生かす方法を検討することも有益です。



20 データベースを使った検索についても、検索窓のスタイルだけではなく、作家リスト表示、テーマ別、モチーフ別、などいくつかの検索方法の提供を工夫することができます。



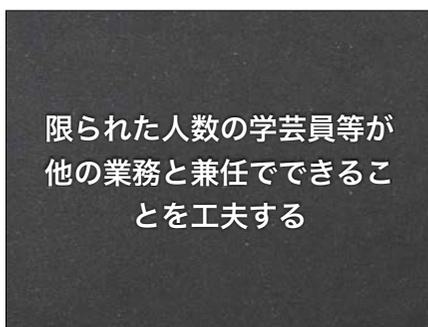
21 少し余談ですが、作家やテーマ別のリスト表示にも、その中に何件の作品があるのか件数を表示するようにしました。期待してクリックしたら、結果表示が少なくてガッカリというのをなくしたかったという次第です。



22 ここまで、駆け足ですが、収蔵品データベース、ウェブサイトでの所蔵作品情報発信について見てきました。次は作品そのものからウェブ上での発信までの作品情報のハンドリングについて見ていきたいと思います。



23 全美の会員館は401館ですが、多くの館では学芸員は数名程度です。広報担当者がいないことも多く、学芸員や職員が他の業務と兼任することが普通です。ホームページでの作品情報発信のための作業を、展覧会や鑑賞教育、作品保存研究などの業務に加えて担当するのは困難です。



24 そこで、普段の学芸員としての作業がそのままWebでの情報発信につながるようにする必要があると考え、IT技術によるシステムを通常の学芸員業務に落とし込んでいくことを意識しました。



- 25 作品の出品歴情報を例に見ていきます。作品を他館に貸し出す際、手続き文書が作成・ファイリングされます。これを貸出歴として収蔵品データベースに記録する作業を行うことで、そのままWeb上に出品歴として掲載するデータが準備できるような業務フローとシステムを工夫しました。



- 26 作品の移動履歴の記録は日常の作品管理でも一貫して行われています。具体的には、写真のような作品に付属したICタグとハンディターミナルを使って、作品のアドレス管理を行っています。



- 27 ハンディターミナルで、誰が、いつ、何を、どこからどこへ移動したのか、という履歴が収蔵品データベースに蓄積されます。



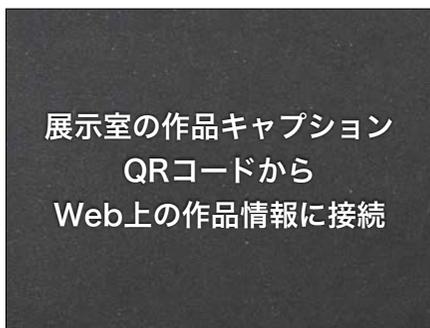
- 28 作品貸出後に書類を元に入力される記録とともに、移動時にハンディターミナルによる移動履歴が記録されます。事務手続きと移動作業の両面から「収蔵品の移動を記録する」という学芸業務になっています。



- 29 また、作品貸出時に作成される作品の点検調書や、作品に付随する文書資料は、それぞれ収蔵番号順の収蔵品ファイルに整理・保管しています。



- 30 一方、展示室では、作品のキャプションにQRコードを表示しています。来館者のスマホからQRコードを読み取り、Web上の作品詳細ページに掲載された出品歴などの詳しい情報に簡単にアクセスすることができます。



- 31 作品現物、文書資料、収蔵品データベース、Web上の作品情報までが収蔵品管理業務全体の中で連続的に取り扱われるように試みています。



- 32 よろしければ右下のQRコードをお試しください。展示室でのQRコードからのアクセスまでを視野に入れると、バックヤードの収蔵品管理業務から来館者による作品情報へのアクセスまでが、収蔵品データベースや、ICタグによるアドレス管理、作品情報のファイリングなどの相互に連携する業務フローにより担保されるようなイメージです。



- 33 なお、データベースの更新は、データベースから作品情報修正フォームを印刷して、赤字修正を行い、学芸部内で回覧・承認するプロセスを設けています。こうしたアナログな手法も併用しながら、館内業務に活かされるデータベースを目指しています。

当館の所蔵作品情報の
ジャパンサーチとの
連携方法について

- 34 次に当館のジャパンサーチとの連携方法についてご紹介します。

私立の一美術館がジャパン
サーチに参加したい場合…

- 35 ジャパンサーチについては、所蔵作品情報発信の新たなプラットフォームとして、高い関心を持っていました。

(美術館のデータをまとめ
るつなぎ役がいないと
参加できない!?)

- 36 しかし、ジャパンサーチでは分野ごとにまとめたデータ提供者をつなぎ役とした連携方法が採用されていました。現時点では、美術館の所蔵作品データを取りまとめるアーカイブ機関は存在しません。美術館は、単独では参加できませんでした。

2020年7月、全国美術館会議
がジャパンサーチの
つなぎ役に

37

そこで、昨年8月のジャパンサーチの正式公開を目前に、全国美術館会議がジャパンサーチのつなぎ役となり、会内の美術館がジャパンサーチに参加することが可能となりました。

2020年7月28日、
東京富士美術館が
全美をつなぎ役として
ジャパンサーチに
データ連携

38

ただし、全国美術館会議は会員館の所蔵作品情報を取りまとめていないため、つなぎ役としての役割は、ジャパンサーチを運営する国立国会図書館と会員館の橋渡しと、会員館に対するサポートが中心です。



39

具体的には、会員館は、全国美術館会議に申し込み後、国会図書館とデータ提供に関する書類の取り交わしを行います。その後がちょっとハードルが高いのですが、美術館自身でデータをジャパンサーチに連携することになります。

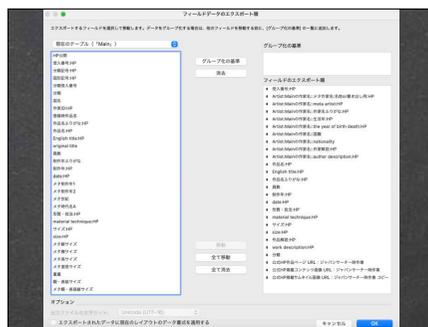


40

さらに美術館がジャパンサーチに掲載する作品情報は、基本的に自館ウェブサイト
で公開している作品情報とリンクさせる必要があります。例えば、ジャパンサーチ
に作品の画像を表示させたい場合、自館がウェブサイトに掲載している作品画像の
URLを提供する必要があります。



41 また、ジャパンサーチの作品ページから自館ウェブサイトの該当作品ページへのリンクを貼るためには、自館ウェブサイトの作品ページのURLを用意する必要があります。



42 これらのURLは、収藏品データベースのデータには普通は含まれていないため、用意する方法を検討しなくてはなりません。画面は、収藏品データベースからジャパンサーチ用のメタデータを書き出す項目設定です。



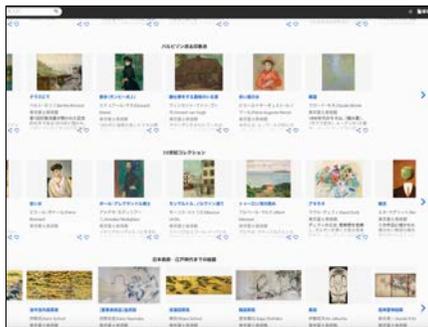
43 下から3行がジャパンサーチ連携のために所蔵品データベースに追加した項目です。



44 また、ジャパンサーチで表示される画像の権利表記については、基本的に原作品に関する権利ではなく、デジタル画像データについての権利とその二次利用条件の表示が求められます。



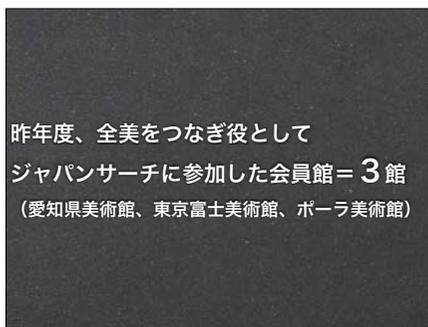
- 45 原作品が著作権で保護された作品である場合は、その複製物であるデジタル画像データにも原作品の著作権が及びます。
一方、原作品の著作権が満了している場合は、デジタル画像データの撮影者等の著作権についての権利表記並びに二次利用条件を表記することが求められています。



- 46 一つ工夫した点は、連携機関のページで主な収蔵品を一覧できるレイアウトを準備したことです。ジャパンサーチの管理ツールで、こうした一覧性の高いレイアウトを簡単に作成することができることに感心しました。



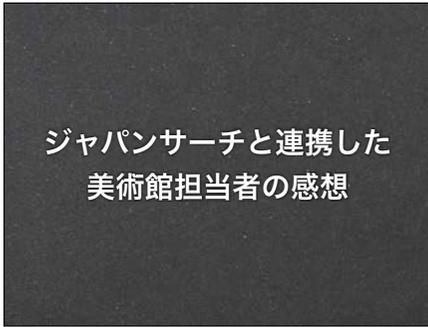
- 47 ジャパンサーチへの連携データの更新については、収蔵品データベースに書き出し用スクリプトを追加しました。ボタンひとつでエクセルが書き出されます。書き出したエクセルファイルをジャパンサーチ管理画面からアップロードすれば最新のデータに簡単に更新できます。



- 48 昨年度は、全国美術館会議をつなぎ役にジャパンサーチに参加した美術館は愛知県美術館、東京富士美術館、ポーラ美術館の3館でした。



49 全米の研究部会としては、今後も参加を希望する美術館に適切なサポートが提供できるように取り組んでいきます。（写真：2020年1月23日第56回部会合）
また、所蔵作品情報の発信に積極的な美術館にジャパンサーチについて関心を持ってもらえるような情報を届けたいと思います。
今年度は参加館を募集する啓発イベントの開催を検討していきたいと思っています。



50 まとめにジャパンサーチにデータ連携をした美術館の担当者としての感想です。



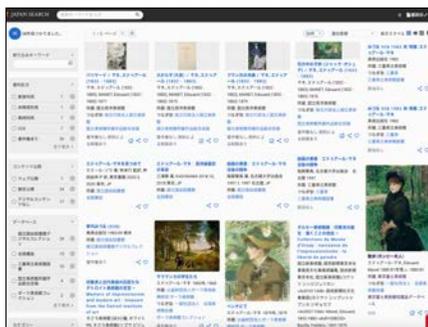
51 1点目は、メタデータや画像の権利表記、ユーザー目線の利用条件表示について自身の知見が広がりました。今後、ジャパンサーチでの利用条件表記を参考に、自館のデータベースにも利用条件表示を加えていきたいと考えています。



52 2点目は、ジャパンサーチ連携をきっかけとした変化で、自館ウェブサイト上の作品画像をダウンロードして自由に利用できるという運用を始めたことです。



53 当館ではこれまで外部企業に収蔵品画像のライセンス販売を委託していました。現在は高画質画像についてのみ従来通りのライセンス販売を継続し、ウェブ掲載をしている120万画素前後の画像については無条件で自由に利用できるようになりました。



54 ジャパンサーチと連携したことで、館外のコンテンツと一括で検索できるようになりました。幅広い文脈の中で所蔵作品が利用される可能性が広がる点に期待しています。所蔵作品のプレゼンスが他館の情報と一緒に運用されることでより高まるという認識です。文献・図書情報と一緒にヒットする点などにも可能性を感じています。



55 以上で事例報告を終了させていただきます。ありがとうございました。